

第三十四回 少年の主張鳥取県大会 優秀賞作品

まあるい正義感

倉吉市立東中学校三年 大村麻弥

「よっしゃ、ラッキー！」

テニスコートには私の声が響き渡る。部長が練習メニューをコールするごとに「はい！」と返事してとりかかるのが東中テニス部のやり方だ。その返事も誰より早く反応することに決めている。私は声を出すことが大好きだ。

小学校の頃から、はきはきと発表し、友だちにもどんなことでも言える性格だった。家族にも学校であったことをこと細かく、一から十まで話す。昨日も今日も、私はそういう人間だ。全然変わっていない。

「正しい」と思ったことは貫くというのが自分の信念で、どんな時も自分が「正しい」と判断できたら周囲の人がどう思うかなんて考える前に行動していた。いや、行動できていた。いや、行動してしまっただけだ。

中学校一年生の時のことだ。ある友だちとのトラブルに口出しすることが嫌で、当事者同士に任せるべきだと判断した私は、野次馬的にトラブルに首をつっこむとする友だちに「やめたほうがいい。彼女たちの問題なんだから、変に興味本位で関わったらだめだよ。」ときっぱり言ってしまった。その次の日あたりから私の周りから友だちが一人減り、また一人という風になくなった。さすがにシヨックで、なぜ？、という思いでいっぱいだった。そして「もうずっと関わらないでくれ。」というような手紙まで届き、仲間から孤立することになってしまった。二年生になってもしばらくは、声を出す大村が、声を出さない大村の状態になってしまった。そうなるのとテニスコートでも不調となり、二番手に落ちてしまっていた。

中学生になると、あたりまえ、のことをすることができない子は「まじめな子」であり、「いい子ぶってる子」と判断され、みんなから距離をおかれた。教室では心の底で、正しい私、は間違っていないと強く思いつつも、声に出せないまま三年生になっていった。こうなるとテニスの仲間にもなかなか本音が言えず、一人で行動することが多くなった。いつのまにか「どうせ」という言葉ばかり頭の中に出てくるようになった。

どうせ、やったって一番手に戻れない。

どうせ、私なんて練習したってうまくなれない。

どうせ、私なんて誰にも認めてもらえない。

どうせ、私なんて教室にいる意味がない。

どうせ、どうせ、どうせ・・・一人でいい。

声を出すということにどんどん臆病になっていった。そんな私に担任の先生が、気まづくなっているAさんと向かい合って話してみないかと場をつくって下さり、Aさんの言い分をきくチャンスが訪れた。Aさんは私に対していろいろな思いをスレートにぶつけてきた。一番私がびっくりしたのは、私が「被害者ぶっている」という言葉だった。ああ、そうだったんだ・・・そんな風に人からは見えていたんだと。私の「どうせ」という思い込みが友だちの心を遠ざけていたことを知った。自分の真っすぐさや、「正義感」が人から嫌われるのだと思いきこんでいた。それが間違っていた。「正しい」のが間違いではなく、「正しさ」を貫こうとするあまり、伝え方を間違えていたのだ。「自分の世界」を優先し、人との関わりや

相手の心の声を聞こうとしていなかった。相手と向き合い、相手のストレートな思いを受けとめることでやっと気づけたのだ。思えばテニスの試合も同じだ。後衛としての役割を前衛のペアに押し通すばかりで、ペアの気持ちを考えず、ミスをしたことばかり責めていた。うまくいかない。「どうせ」が出てきてしまっていた。

この経験から、私は「正しいこと」を押し通す時には、まず自分の気持ちに素直になろうと心がけている。中学三年生の今、生活委員長として服装の乱れを注意する立場にあり、「正義感」に燃えて本来の私を取り戻して行動している。しかし、注意する相手に対し、「ありがとう、きいてくれて。」とか「ごめん、きつく言い過ぎたかも。」とか「次から頑張ろうや。」などの言葉も忘れずに添えるようにしている。カチカチの正義ではなく、まあるい正義感を使えるようになりた
いから。

声に出して伝えることの難しさを知り、また、「言葉」に出すことが自分を救うということも、中学三年間で学んできた。コートの中でもコミュニケーションがとれるようになり、励ます言葉が増えた。目標としていた一番手のペアになれた。総体予選を勝ち抜き、県総体にも出場した。

「ナイス！」「ナイスボレー！」ありがとう、私のパートナー、そして友だち。「わが道を歩んでいる」だけではない私が今、ここにいます。相手に頼ったり、相手にあつたかい言葉をかけたりしながら、「まあるい正義感」を貫いていきたい。